

基礎生物学研究所の設立構想から創設まで

古 谷 雅 樹

(基礎生物学研究所客員教授)

1. はじめに

昨年(2019年)の12月に、江口吾朗さんから「2月末頃までに表記のような題で何か書いて欲しい」と、ご依頼があった。時間も大変限られており、また私自身その任でないことは重々承知の上で、敢えてお引受けしたのは、基礎生物学研究所(基生研)創設10周年という一つの区切りに於て過去を振り返ることは、今日の基生研を成すまでに人知れず苦労を重ねられた多くの先輩諸氏に対する義務の一つと考えたからである。さらに、創設の理想から現在の基生研を見たときの問題点を述べて、次の10年に大いに期待したいと考えたからである。

基生研設立の胎動が昭和30年代に始まってから、それが実現するまでの経緯を振り返ってみると、大きく3つの時期に分けられるように見える。第1期は戦後の荒廃から日本の生物学研究を立て直すとする生物学者のボランティア活動の時代である。第2期は、そのような推進運動を受けて、日本学術会議が生物学研究所設立を政府に勧告した昭和41年から、文部省が生物系基礎研究所(仮称)設置調査に必要な経費を概算要求した昭和49年までの期間で、ボランティア活動が正式に国の事業として認められるまでの時代といえよう。第3期は、文部省における各種会議の審議を経て、国立学校法の一部を改正する法律の施行により、生物科学総合研究機構基礎生物学研究所が創設された昭和52年5月2日までの期間である。以下、各期の主要な出来事と、その背景について、要点を纏めてみた。

2. 初期の構想

第2次世界大戦が終って次第に敗戦の影響が薄まるに連れて、わが国では工業生産が急激に発展した。それに伴い、研究者や技術者の養成が急務となり、工学部のみならず理学部でも物理学や化学などの分野では、大学も研究所も著しく拡充改組された。しかし、基礎生物学関係の分野は、教育や研究の体制が昭和30年代になっても旧態依然で放置されたままであった。一方、欧米諸国では戦後、生命現象の解明に物理学や化学の方法を取り入れた新しい生物学が発展し、その進歩には目を見張るものがあった。この様な事態におかれた我が国の生物学者は、将来に対する焦燥の念に次第に駆られて、大学や関連学会において活発に生物学研究体制の将来計画(案)を論ずる雰囲気が生まれた。その中で、主要な要望の一つが基礎生物学研究所の設立であった。昭和30年代は、この様な胎動の時代であったと言えよう。

日本植物学会では昭和36年以来、生物学研究長期計画委員会(第1次、第2次、第3次)を中心に、わが国の大学教育や研究機構の将来構想を検討し、昭和39年の春に「生物学研究長期計画(第

2次案)」を日本学術会議の植物学研究連絡委員会へ提出した。この第Ⅲ章1節が基礎生物学研究所（プロジェクト研究所）という題になっており、研究所が必要な理由、研究所の形態と組織が提案されている（植物学雑誌77：103－105，1964）。この中に現在の基生研の原型をかなり見いだす事が出来るが、この案の特徴は、固定した研究課題を掲げた幾つかの研究部門を設けても、数年を経ぬうちに実際の学問の発展にそぐわなくなると考えて、全ての部門を、数年から10年の期限を持つプロジェクト・チームとした点にあった。

この様な状況を反映して、日本学術会議では昭和39年に生物科学研究連絡委員会に設けた生物科学将来計画小委員会（委員長林孝三）において、上記の生物学研究所設置案を検討し、改めて基礎生物学研究所の設置を提案した。この案は、植物学及び動物学各研究連絡委員会でも十分に検討され、さらに昭和40年1月に長期研究計画調査委員会（委員長福島要一）に付置された生物科学将来計画小委員会（委員長二国二郎）において、人間科学、情報科学、物理科学、薬学など関連各分野から提出された将来計画案と併せて検討審議が重ねられ、それらを取りまとめて調整した結果、昭和41年1月に纏められた「生物科学第1次5か年計画」の中によりやく“生物研究所（仮称）設置要望書並びに設立案”が取り入れられたのである。この提案を請けて、日本学術会議は昭和41年5月23日に第46回総会に於て「生物研究所（仮称）並びに生物科学研究交流センター（仮称）の設立」を内閣総理大臣に勧告した。

3. 赤堀委員会と森脇委員会の役割と活動

日本学術会議では、上記の「生物研究所（仮称）並びに生物科学研究交流センター（仮称）の設立」の勧告が政府により速やかに実施されるために、引き続き昭和49年9月20日に生物科学研究交流センター及び生物研究所設立準備委員会（委員長赤堀四郎）を設置し、更に同委員会内に生物研究所設立準備実行委員会（委員長森脇大五郎）を設けて、研究所設立の具体案を検討した。本設立準備委員会が昭和42年5月にまとめた設立趣旨並びに構想によれば（動物学雑誌76：459－466）、その骨子は基生研設立を最初に立案した上記の林小委員会の案を受けて、創設設備費約20億円で6研究部20部門（総人員280名）の組織を盛った案を作成した。この案は、生化学から細胞生物学、発生生物学、生理学、生態学まで広く生物学全分野を網羅しており、また上記の学術会議勧告案の説明資料では本研究所は「一応大学付属の共同利用研究所として考える」となっているのに対して、森脇委の構想では「新しい型の共同研究所」として発足することを強く打ち出した。また、本研究所の名称は、赤堀委員会で「基礎生物学研究所」が適当であるとされ、昭和42年4月の学術会議の総会に於て承認された。

その後、関係者による基生研設置推進運動は継続して着実に進められた。昭和46年の夏には赤堀委員会幹事会は推進に関係した各学会、各委員会などから推薦された初代所長候補を1名に絞る作業をする時期に到達したと判断して、昭和46年8月5日の赤堀委員会において初代所長予定者に桑原萬寿太郎氏を選んだ。

4. 団委員会と桑原委員会の役割と活動

この段階にいたり、赤堀四郎氏から団勝磨氏に委員長が交代した基礎生物学研究所設立準備委員会は、昭和46年11月、いよいよ具体的な研究者や研究課題を準備して、設立の運動や交渉を進めるために、同委員会に実行委員会を設けることを決定した。さらに、同年12月17日に準備委員会幹事は、新たに発足した実行委員会の委員長に桑原萬寿太郎氏、委員に岡田節人、金谷晴夫、岡田善雄、山名清孝、団勝磨、神谷宣郎、太田行人、竹内郁夫、柳島直彦、西村光雄、林孝三の各氏を委嘱し、また、幹事には立田栄光、大島康行の両氏が選ばれた。その後、委員に古谷雅樹が加えられ、幹事は立田氏から青木清氏に交代した。

桑原実行委員会は昭和47年4月4日に第1回委員会を開催した。それ以来、基生研設立の日まで、表に裏に基生研設立の準備に必要な膨大な作業に従事する事になった。同年12月に印刷された「基礎生物学研究所」設立趣旨並びに構想によると、10部門（うち3部門プロジェクト研究）で総人員164名、建築費8億余円、創設設備費約17億円となっている。

5. 文部省における創設準備委員会

昭和48年10月31日、文部省学術審議会茅誠司会長は、分子科学研究所、基礎生物学研究所、及び生理学研究所（仮称）を緊急に設立する事が適当である旨、奥野誠亮文部大臣に報告した。

これに関連して、分子研創設準備経費を要求した昭和48年末の時点に、3研究所の設置場所として愛知県岡崎市の愛知教育大学跡地が候補地として浮かんできた。多くの候補地の中から、現在の地が選ばれた主な理由は、水・エネルギーの供給、排水・廃棄物の処理、交通の便など自然科学系の研究所の環境として適していることに加えて、国有地であったので多額の土地購入費が必要でなく、必要な面積の土地が迅速確実に入手出来て、すぐに建設にかかること等が挙げられた。岡崎の現在地が公式に決定されたのは、昭和49年7月文部省に設けられた分子科学研究所創設準備会議に於てである。

この時期には、基生研の創設はまだ正式に文部省では認められていなかったもので、桑原先生が上記の分子研準備会議に、私が同会議土地施設専門分科会に委員として加わり、基生研に関わりのあることを予め考慮して頂くように計ったが、正式に発足していない基生研に関すること故、歯がゆいことも少なくなかった。しかし、関係各位の御理解とお力添えにより、正式に発足する1年前から準備に関係出来たことは基生研の創立に取って大きな意義があった。特に基生研に予定された土地や建物の計画について当時の文部省管理局教育施設部佐藤讓計画課長が下された英断と配慮には、私はいまなお尊敬と感謝の念を抱いている。

昭和49年8月、昭和50年度概算要求において、生物系基礎研究所（仮称）設置調査に必要な経費が初めて要求され、昭和50年度予算に於て岡崎基礎総合研究所（仮称）設置調査費174万円が計上され、ここに長年の夢が実る糸口が開かれることになった。それに伴い昭和50年5月10日、文部次官裁定により岡崎基礎総合研究所（仮称）調査会議が設置された。この会議の主要な目的は、既に文部省学術審議会から設置を勧告された基礎生物学及び生理学の両研究所を岡崎地区に設置するための調査を行うと共に、昭和50年4月に設置された分子科学研究所を含めた3研究所からなる総合研究所の設置を

目途して調査が行われた。岡崎基礎総合研究所（仮称）調査協力者は3研究所の創設推進関係者を含めた学術審議会関係の学識経験者で（表1）、伏見康司氏が座長となった。

この調査会議では、基生研の緊急に設置を必要とする理由、設置の目的、事業内容、組織、施設、特色、国内・外の状況を調査したが、これらの事項の原案は全て予め桑原実行委員会で調査・審議し

表1 岡崎基礎総合研究所（仮称）調査協力者名簿
調査協力者

氏 名	現 職	全体会議	専 門 分 科 会	
			基礎生物学・生理学	総 合 研 究 所
赤 松 秀 雄	分子科学研究所長	○		
稲 田 献 一	大阪大学社会経済研究所教授	○		○
井 口 洋 夫	分子科学研究所教授	○	○	○
内 蘭 耕 二	東京大学医学部教授	○	○	○
梅 棹 忠 夫	国立民族学博物館長	○		○
岡 村 總 吾	東京大学工学部教授	副座長		主 査
勝 木 保 次	東京医科歯科大学長	○	○	
金 谷 晴 夫	東京大学海洋研究所助教授	○	○	○
桑原万寿太郎	上智大学理工学部教授	○	○	
柴 田 俊 一	京都大学原子炉実験所長	○		○
杉 二 郎	日本学術振興会理事	○		副主査
田 島 弥太郎	国立遺伝学研究所長	○	主 査	
長 倉 三 郎	東京大学物性研究所教授	○		○
伏 見 康 治	大阪大学・名古屋大学名誉教授	座 長		○
占 谷 雅 樹	東京大学理学部教授	○	○	○
牧 野 昇	三菱総合研究所常務取締役	○		○
山 本 正	東京大学医科学研究所長	○	副主査	
亘 弘	京都府立医科大学教授	○	○	○

専門調査協力者

神 谷 宣 郎	大阪大学理学部教授		○	
山 岸 俊 一	東京医科歯科大学医学部助教授		○	

た資料によったので、同実行委員会の作業量はこの1年間実に莫大なものであった。それにも増してこの調査会議に課せられたもう1つの調査事項である3研究所の統合は、基生研設立推進作業の中で最も難しい問題を含んでいたと言えよう。それは、それまで全く異なる推進母体によって進められたきた3研究所それぞれ単独の構想が、大蔵省と行政管理庁の文部省に対する検討要請もあって、ここで初めて「愛知教育大学岡崎分校跡地に研究所群（団地）を建てる」という構想に変える方策の検討であった。それに伴って生じる諸問題は複雑で多岐にわたり、其れらの解決には創設推進者側も文部省側も非常な努力を払い、並々でない神経と時間を使った。現在の岡崎国立共同研究機構の大筋は、この調査で出来上がったと言ってよいと思われる。

昭和51年5月10日には文部大臣裁定により、既に設立されていた分子研に「基生研と生理研の設立」の為の調査室が設置され、その室長に当時東京大学海洋研究所助教授であった金谷晴夫氏がなられ、山岸俊一次長、小川克也総主幹、小杉祐司主幹、川崎清一事務主任と共に、この大任に当たられた。其れ以来、金谷氏は創立の日まで約1年間、文部省の一隅の狭い事務室に陣取られて、文字どおり寝食を忘れて基生研創設の為に総てを捧げられたのである。また調査室がこの1年間、創設作業を進めるにつれて時々刻々必要とする計画案、それに関係する国内・外の比較参考資料などは、随時私が桑原実行委員会の窓口になって各委員に作業の分担をお願いし、その結果を調査室に届けた。この作業は、例えば各予定部門の研究計画のような次元の高いものから、設備・備品の型式や価格の調査や図書館に購入する書籍のリスト作りに到るまで様々な内容であったが、いつも時間が限られていたので、極めてきついものであった。しかし、その間の各実行委員が示した迅速で誠実な応答は、私の人生経験の中でも希にみる素晴らしいものであって、同志愛に近い雰囲気であった。其の桑原実行委員会の不断の努力が金谷氏の活躍を支えていたのも事実である。

この調査室の作業と平行して、分子研に岡崎総合研究機構調査会議（座長：岡村総吾東大教授）が設置され、昭和50年度の岡崎基礎総合研究所（仮称）調査会議の報告を受け継いで、岡崎地区における研究所の設置形態を審議した結果、当面は基生研と生理研の2研究所からなる「生物科学総合研究機構」を発足させることとし、その創設経費9億1,800万円と定員22人が昭和52年度予算に計上された。

そして、昭和52年5月2日に第80国会に於て国立学校設置法の1部を改正する法律の施行により、遂に念願の基生研が生物科学総合研究機構のもとに誕生したのである。そして、桑原萬寿太郎氏が初代の基生研所長に任命され、同時に同機構長事務取扱を兼ねられたのである。

6. 基生研創設当時の事情

基生研の創設にあたって最も大きな問題は、3研究所の総合化であった。この問題は、3研究所の設置場所が同一地域になったために起きたもので、上記の岡崎基礎総合研究所（仮称）調査会議も「学問領域や研究体制の整備状況の違い、人事・予算面での自主性などを考慮すると、3研究所の総合化は、十分に時間をかけて行うことが望ましい」と報告した。そこで、総合化は2段階で行う事となり、昭和52年度予算において、「生物科学総合研究機構」の創設の為の経費及び人員が計上されたが、昭和56年度には分子研を含めた新しい機構に再編成すること、それ迄は生物科学総合研究機構の

事務は分子研で処理することが了解された。従って、基生研は事務機構を全く持たない初めての国立研究所として出発した訳であるが、このため設立当初は基生研の影は薄く、山手ロッジのスリッパに到るまで分子研と大書され、町のタクシーも「基生研へ」では通用せず「分子研へ」としばしば頼まなければならなかったし、その傾向は当初から現在まで一貫して続いている。

現在、岡崎機構のキャンパスは我が国では希な美しく整ったものであるが、創設当時は愛知教育大学時代の古い木造校舎がたくさん散在している中に、幾つかコンクリート造りの建物が残っていた。基生研は旧図書館を改修して出発したわけであるが、初めの二、三年はまともに実験を行える状態ではなかった。しかも、その不備な研究環境に耐えながら金谷氏を中心にして初期の所員の方々は、建物を始め、後続の研究部門の創設に必要な事務的作業を明るい雰囲気で捌かれておられたのであった。そして爾来8年がかりで基生研は完成したのである。

7. 創設の理想からみた基生研運営の問題点

夢の基生研が出来て、早くも10年経った。創立までに多くの研究者が心に抱いた理想が、単なる夢に終わらないために、主要な点について歴史の節目毎に振り返ってみることは関係者の義務であり、自己規律の出発点であろう。

第4章で詳しく述べたように、全く独立に創設計画が進められてきた無縁の三つの研究所案を、一つの機構に纏める作業は困難を極めた。しかし、現在、分子研、基生研、生理研から成る岡崎国立共同研究機構を極く自然な感じでご覧になる方も多いので、創設時最大の問題点は関係者の努力と協力により、何とか切り抜けたことは、岡崎機構成功の第1点にあげられるように思う。設立以前から最も心配された3研究所の autonomy は、例えば定年退職の年齢が3者で皆異なるように、かなり良く守られた。しかし、各研究所が事務機構を全く持たないため起こる研究者および管理局関係官へのしわ寄せ、日常業務の不合理性や不便さは、創設当時の予期を遙かに越えている。

研究者の流動性は、創設の推進運動以来、常に唱えられてきたことの1つである。基生研完成後、まだ4年しか経っていないが、現在、実員7部門について見ると初代教授が4人と二代目が3人になっており、客員教授は初代が1名、2代目が4名、3代目が1名となっている。日本の慣習からみれば、かなり良く入れ替わっているように思われるが、将来に亘って固定化しないためには、一層の努力を要することと思われる。例えば、基生研内における昇格人事は原則として行わないこととか、赴任後10年経ったら国際的視野から check and review を行うことは、その気になれば実行可能なことである。

また、教授の代替りに際して、せめて創設費の半分か、少なくとも三分の一程度の予算が与えられないと、基生研本来の使命を全う出来なくなるのではないと思われる。特に2代目以降の教授の着任に当たっては、助教授や助手の方々が、教授の先生がたの異動と同時に他に職を得ることがわが国の現状では極めて難しいことから、基生研のみでなく他の研究・教育機関も人事の流動性を高めない限り、理想倒れになってしまう恐れが強い。

わが国では、一般に新しいものを作るときには、沢山予算を与えられるが、古くなった設備や備品

を更新することは、極めて難しいのが現状である。基生研もその例外ではない。十年前に揃えた大型設備や測定装置には、性能の見劣りするものが増え、常時使う機器は寿命を果たし始めている。この問題を解決する為の基生研の運営経費について、他の部局と比較したのが、表2である。これを見る限り、基生研が格別恵まれているとも言えないようである。

表2 昭和61年度当初予算比較

関係省庁	部 局	計 (億円)	人件費(億円)	[人数]	運営・設備費 (億円)	[講座・部門数]
文 部 省	岡崎国立共同 研 究 機 構	49.6	15.8	331	33	43
	(内 基 生 研	8.2	3.2	71	4.99	13)
	東 京 大 学 理 学 部	59.6	33.7	543	25.9	90
	高エネルギー 研 究 所	322.9	24.6	577	298.3	80
農林水産省	農業生物資源 研 究 所	24	12	236	12	42
環 境 庁	公害研究所	42.6	12.6	250	30	40
科学技術庁	理化学研究所	148.5	53.0	612	95.5	49

何はともあれ、岡崎機構の創立以来、この10年間に文部省直轄研の新設が無かったことを思えば、基生研が10年前に創立されたことは、わが国の基礎生物学の発展に取って本当に良かったと思う。また、最近 OKAZAKI の名を口にする外国人も急速に増えてきた。次の10年は基生研にとって正念場である。大ききな期待を抱いて筆をおきたい。

謝 辞

昭和30および40年代当時の事情については、団勝磨，林孝三，神谷宣郎各先生からお話を伺ったり資料を頂戴して、纏めさせて頂いた。ここに厚く御礼申し上げたい。